

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 20 日現在

機関番号：37701

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2011～2012

課題番号：23800069

研究課題名（和文）

“極小規模離島村”における持続可能な博物館活動モデル構築のための実践的研究

研究課題名（英文） Practical research toward the construction of a sustainable museum activity model in a small-scale island village

研究代表者

川宿田 好見 (KAWASHUKUDA YOSHIMI)

鹿児島国際大学・就業力育成プロジェクト室・就業力育成プロジェクト調査研究員

研究者番号：40616166

研究成果の概要（和文）：

本研究では、“極小規模離島村”をフィールドとした実践的研究を行い、そうした地域にとって望ましい博物館活動のあり方についてのモデルの提示を目指した。住民の誇り・アイデンティティの回復につながる埋もれた文化資源の掘り起こしや、それらの意義づけなどを住民と協同で実施し、住民自身による広義の博物館活動を持続的に維持するためのモデル構築を特に目標とした。本研究での活動を通じて文化財や歴史に多くの住民が関心を持つようになり、住民側から活動の具体的な提案を受けるまでに至ったことが、アンケート調査結果からも住民の様子からも看取できた。文化財から地域の歴史を復元し、住民がその歴史に誇りをもつ過程を記録・分析することができ、文化財の新たな活用法、博物館建設が不能な地域における新たな博物館活動のあり方が提示できた。

研究成果の概要（英文）：

The aim of this study was to conduct practical research using a small-scale island village as a field of study and to present a model for desirable museum activities for such a community. I drew attention to cultural resources which lead to the recovery of the pride and identity of island residents, working together with them to define the meaning of said resources with the aim of constructing a model for museum activity that the residents could then sustain in a broader sense. Resident responses to a questionnaire showed that, through the activities of this study, they had become interested in local cultural properties and history, and we even received specific proposals from the residents. Making use of cultural properties I was able to recreate the local history and to record and analyze the process by which the residents came to take pride in their own history. I was able to show that, in a location where the construction of a physical museum is out of the question, cultural properties can be utilized through new museum activities.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2011年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2012年度	1,100,000	330,000	1,430,000
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：博物館学

キーワード：博物館学・パブリック考古学・文化財・3D レーザースキャナ・ミュージアムパ

1. 研究開始当初の背景

70年代末～80年代初頭の postprocessual archaeology の出現に象徴される、人文・社会科学での自省的議論の先鋭化以降、public archaeology、public anthropology など“public”を標榜する活動が世界的に行われている。博物館でも博物館概念や活動の見直しが進み、イギリス Alexander Keiller Museum の、歴史的解釈を押しつけず「考えさせる展示」への展示替え (P. G. Stone (1994). *The re-display of the Alexander Keiller Museum, Avebury, and the National Curriculum in England*, P. G. Stone & B. L. Molyneux (eds.), *The Presented Past: Heritage, museums and education*, pp.148-189. London: Routledge) や、1986年のヨーロッパ・北米の“Museum Comes to Your School Project”の実験、それを受けて翌年から運用されたコロンビアでの貸出用ティーチングパッケージを主ツールとした学校教育の実践 (I. Delgado Cerón & C. I. Mz-Recaman (1994). *The museum comes to school in Colombia: teaching packages as a method of learning*, *ibid.*) は、その好例であろう。

こうした動向は我国の博物館にも直接・間接に刺激を与え、貸出用ツール設置館の増加、社会との強い関わりを模索する動き等がみられる。カナダで行った現地調査でも、先進的教育プログラム等を通じて博物館が住民の強い支持を獲得しており、博物館が住民の誇り・アイデンティティの醸成に役立つことが判明した (川宿田好見(2007). *カナダにおける博物館とその活動『鹿兒島国際大学考古学ミュージアム調査研究報告』*, 4: 13-17)。以上は博物館が地域に不可欠との認識を持たれるに至った好例である。こうした動向と相俟ってアウトリーチ活動も国内外で活発化しているが、上記コロンビアの例では、博物館のない町や村でさえ、ツールを駆使した教室での児童生徒自らによる博物館活動が、先住民への誤解の払拭、科学的思考や博物館リテラシーの向上に寄与している。

以上を踏まえて、より積極的に、博物館設置が困難な「極小規模離島村」においても、学校等の既存施設を利用し住民全体を巻き込んだ博物館活動の拠点とするのが有効であると着想した。こうして、“public”な活動と博物館概念の柔軟な運用を視野に入れた取り組みにより、さらに高次で効果的な博物館活動の段階へと至ると確信した。一方、ITの高度化と普及は博物館サービスの充実やサービス可能圏の拡大に繋がったともいえるが、現実には、本研究で扱うような小規模離島村には、国内の有名博物館や MoMA な

ど海外の美術館にネットでアクセスすることなど出来ないし思ったこともない、博物館に非常に無縁、という「弱者」が多いことは近年の調査でも明らかである。つまり、博物館側が努力すればするほど、アウトリーチが及びにくい小規模離島村などの「へき地」と、他の地域とでは、博物館からの恩恵にかえって大きな格差を生じるという皮肉な事態をもたらしているともいえる。この問題に限っても、早急に対処すべき課題なのである。

「極小規模離島村」は、1)過疎・高齢化・低所得・教育の困難・補助金依存等、自立を妨げる問題を抱え、2)島が散在するため村民の一体感が生じにくく、3)博物館やその活動の恩恵にも与れないところが少なくない。そこで、新たな博物館活動の実施が離島村の抱える問題解決への一助ともなる、普及可能なモデルを構築すべきと考えるに至った。他地域の文化や重要文化財等へのアクセスも大切ではあるが、むしろ地元の埋もれた文化的資源を掘り起こし、その意義づけや深い理解を通じて誇りやアイデンティティの回復につなげ活力を取り戻させることは、深く傷ついた小規模離島村にとって必要な博物館活動であると考えた。

これは自民族中心主義や偏狭な地域主義ではなく、欧米の先行例が示唆するようにそれを超越したものである。地域振興に関してフィジーやタイで実施した現地調査では、資金援助や物的援助だけでは多くが不成功に終わっており、博物館活動でも地域住民による主体的活動こそが必要と考えるに至った。そのためには持続的な維持・発展の仕組み作りが重要である。

2. 研究の目的

日本列島には離島が多く存在している。とりわけ、様々な深刻な問題を抱えている「極小規模離島村」では、博物館施設の設置はおろか、アウトリーチ活動などの博物館活動の恩恵にさえ与らない地域が、未だに多い。こうした実状を踏まえ、本研究では、極小規模離島村をフィールドとした実践的研究を行い、そうした地域にとって望ましい博物館活動のあり方についての新しいモデルを提示しようとするものである。

住民の誇り・アイデンティティの回復につながる埋もれた文化資源の掘り起こしや、それらの意義づけなど、住民自身による広義の博物館活動を通じて、小規模離島村特有の諸問題への解決の一助となることを視野に入れつつ遂行し、離島村において質の高い活動が長期的に持続可能となるような自立的システムの段階的構築を目指して、基本的取り組みを実施し、多くの地域にも実際に適応可

能な本格的データを得ようとするものである。

3. 研究の方法

鹿児島県の離島村で最小規模の三島村を主な対象として研究した。

- (1) 埋もれた文化的資源の掘り起こし、資料化、意義づけから開始し、専門家の協力も得ながら住民参加型で実施する。
- (2) 自前の資料、自前の展示を基本として、博物館活動の一つとして展示作業を住民と協同で実施する。
- (3) アンケートと参与観察による細かな情報の解析を通じて多面的な考察を行い、極小規模離島村で住民が自立して質の高い活動を継続できる博物館活動を行うための方策と、それを段階的に進行させるためのモデルを検討する。
- (4) レプリカとリーフレット等からなるミュージアムパッケージの製作と運用等の実験を行う。

4. 研究成果

(1) 文化的資源の掘り起こしと資料化

『三島村誌』等に記録されている考古資料の実見・実測・写真撮影等の資料化を継続して行った。また、三次元形状計測による記録を行い、遺物の現在の状態を正確にデジタルデータとして保存することで、複製が可能となり活用の幅を広げることにつながった。またその成果は、共同での展示活動等を通じて住民へ還元したほか、住民から遺跡・遺物に関する積極的な情報提供を受けることができるようになった。遺跡・遺物等が歴史をしる貴重な証拠であるという認識や自らの歴史を知る喜びが住民に芽生えることとなった。

資料の三次元形状計測や詳細観察など、従来行われている水準を超えた記録を行うことで、資料自体の価値を上げることができたことも特筆しておきたい。

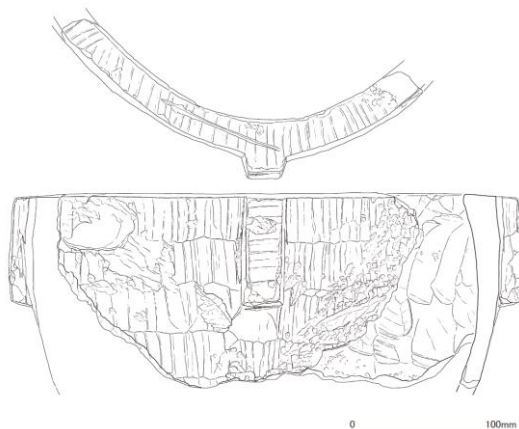


図1 中世滑石製石鍋の高精細実測図

(2) 展示活動の実施

関係諸分野の研究者を含めた研究会「みしま研究会 2012—三島の歴史遺産と島の可能性を考える—」を、鹿児島国際大学みしま研究会と共同で実施した。これまでの研究成果を含む展示を会場ロビーで実施したが、こうした実践が博物館機能の一部を果たすことが可能であることを確認した。積極的に住民からの情報の取得をめざし、三島村の文化財・歴史についての講演と地元の文化財を用いた展示を3島で実施した。島で展示を実施する際には、それぞれの島を特徴づける資料の展示を行うよう工夫した。

みしま研究会での展示を三島村現地でも実施してほしいとの要望もあり、研究代表者が講演を行った「村民文化祭」でも展



図2 みしま研究会での展示・解説



図3 村民文化祭での展示・解説

示活動を行った。展示作業は住民と一緒に
行い、写真パネルの選択やレイアウトにつ
いて意見を出し合いながら作業を進める
ことができた。写真パネルには住民が持参
したものも含めることができた。これまで
「文化財には全く興味がない」と言ってい
た人が、講演で解説した通りに自らの展
示物の解説をするなど、住民の積極的な反
応がみられた。

(3) アンケート調査

2011年度（平成23年度村内遺跡発掘調
査等事業現地報告会）と2012年度（三島
村村民文化祭講演）にアンケート調査を実
施した。アンケート用紙に回答を直接記入
してもらった。それぞれの結果を多変量解
析を用いて分析した。

アンケートの結果から、博物館活動に対
して、村民の理解が得られてきていること
が読み取れた。特に自らが住む島の新たな
魅力をまさに再認識し始めている状況が
わかった。また、「(活動を)急いでほしい」
という意見があった。これは島のコミュニ
ティが崩壊してからでは遅いという、危機
感の表れでもあり、切実な要望であること
が聞き取りからも判明した。自ら努力せず
外部に任せようというのではなく、自分た
ちにできることは行うから一緒に実施し
ていきたい、との住民の思いを理解するこ
うことができた。

(4) ミュージアムパッケージの製作と運用等 実験

文化財の三次元レーザースキャナでの
データの取得、3Dプリンタを用いたレプ
リカの製作、専門家からの文化財の意義づ
け、地元の文化財を用いた住民との共同展
示などが住民の意識や、やる気の向上に役
立つことが明確になった。

活動で得られた情報を踏まえて、極小規
模離島村におけるパッケージのやり取り
による理解と交流の活発化を可能とする
ための試験研究を実施した。「はこぶつか
ん」と名付けたパッケージは、島の歴史が
うかがえる写真パネルや考古遺物、ポスタ
ー、パンフレットなどを収納でき、持ち運
びが可能であるため、展示場所を選ばない
という利点をもつ。これについては今後の
活用について地元教育委員会と協議し、理
解を得ることができた。

初年度は文化財や歴史に多くの住民が関
心を持つようになったことが看取されたが、
次年度は、住民側から活動の具体的提案を受
けるまでに至った。さまざまな文化財から歴
史が復元され、住民がその歴史に誇りをもつ
過程を記録することができた。



図4 ミュージアムパッケージ
「はこぶつかん」

離島における博物館活動や文化財の活用
法についての新たなモデルを提示できたと
考える。このように、今後展開可能な意義あ
る成果が得られた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計6件)

- ① 川宿田好見、平川ひろみ、博物館活動の
展開と地域住民の意識変化—“三島村ミ
ュージアムプロジェクト”を通じて—、
国際文化学部論集、査読無、第13巻第3
号、2012、235-278
- ② 平川ひろみ、川宿田好見、太郎良真妃、
中村有希、考古遺物における三次元記録
と観察—学術的価値の強化・パブリック
考古学・博物館学—、日本情報考古学会
講演論文集、査読無、Vol. 10 (2012)、
2012、23-10
- ③ 川宿田好見、「みしま研究会 2012—三島
の歴史遺産と島の可能性を考える—」を
考える、査読無、広報みしま、No. 478、
2012、4-5
- ④ 平川ひろみ、川宿田好見、太郎良真妃、
中村有希、中園聡、鹿児島県三島村黒島
の滑石製石鍋—文化財の記録と博物館
活動の一環としての三次元化を兼ねて—
、査読無、国際文化学部論集、第13
巻第2号、2012、165-177
- ⑤ 平川ひろみ、川宿田好見、太郎良真妃、

江神めぐみ、中村有希、中園聡、鹿児島県三島村における考古学的・博物館学的実践—三次元レーザースキャナを用いた物質文化の記録とその利用を中心に—、日本情報考古学会講演論文集、査読無、Vol.9 (通巻29)、2012、17~24

- ⑥ 川宿田好見、平川ひろみ、離島における新しい博物館活動のモデル構築へ向けて—鹿児島県三島村を対象として—、国際文化学部論集、査読無、第12巻4号、2012、375~392

〔学会発表〕(計6件)

- ① 川宿田好見、平川ひろみ、太郎良真妃、中園聡、みしまミュージアムプロジェクトにおける“はこぶつかん”の開発—三次元データの考古学的・博物館学的活用—、日本文化財科学会第30回大会、2013年7月6~7日、弘前大学(青森県)
- ② 平川ひろみ、川宿田好見、太郎良真妃、中村有希、考古遺物における三次元記録と観察—学術的価値の強化・パブリック考古学・博物館学—、日本情報考古学会第30回大会、2012年9月29日、同志社大学東京オフィス(東京都)
- ③ 川宿田好見、平川ひろみ、黒木梨絵、中園聡、太郎良真妃、鹿児島県三島村黒島における物質文化の三次元形状計測—考古学的・博物館学的実践—、日本文化財科学会第29回大会、2012年6月23~24日、京都大学(京都府)
- ④ 川宿田好見、三島村ミュージアムプロジェクトの展開、鹿児島国際大学みしま研究会 2012—三島の歴史遺産と島の可能性を考える—、2012年6月9日、鹿児島国際大学(鹿児島県)
- ⑤ 川宿田好見、黒木梨絵、太郎良真妃、平良理揮、“極小規模離島村”における文化財の活用に関する考古学的・博物館学的研究、日本考古学協会第79回総会、2012年5月27日、立正大学(東京都)
- ⑥ 平川ひろみ、川宿田好見、太郎良真妃、江神めぐみ、中村有希、中園聡、鹿児島県三島村における考古学的・博物館学的実践—三次元レーザースキャナを用いた物質文化の記録とその利用を中心に—、日本情報考古学会第29回大会、2012年3月25日、龍谷大学(京都府)

〔その他〕

- ① “はこぶつかん”を利用した展示・解説(2013年5月11日 かがしま県民大学 連携講座)
- ② 三島村案内人養成講座(勉強会)での展示・解説(2012年2月8日黒島片泊)
- ③ 村営定期船みしま船内展示(2013年2月8日)

- ④ 村民文化祭三島村生涯学習推進大会での講演と展示(2012年11月3日)
- ⑤ 三島村案内人養成講座(勉強会)での展示・解説(2012年8月18日硫黄島)
- ⑥ 三島村案内人養成講座(勉強会)での展示・解説(2012年7月23日竹島)
- ⑦ みしま研究会 2012「三島の歴史遺産と島の可能性を考える」(2012年6月9日 鹿児島国際大学みしま研究会と共催)
- ⑧ 「三島村ミュージアムプロジェクト」説明及び、考古資料の展示・解説(2012年2月3日 平成23年度村内遺跡発掘調査等事業現地報告会)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

川宿田 好見 (KAWASHUKUDA YOSHIMI)
鹿児島国際大学・就業力育成プロジェクト室・就業力育成プロジェクト調査研究員
研究者番号：40616166

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：